古今奇談

但伽百物語

1802
C3

門へ13
帙 1802

今辰

百六条の妖化 并 化が家の怪を少くとゝめる
動くとゝ
猿猴山の化 并 和泉国逸乃宮の信のこと
七尾乃妖女 并 古木の樣人の姿のこと
高野の護記 并 塩瀬乃祖淨国のこと
大道寺愛 并 大条氏の怪屋の稱のこと

加面物語巻之三

六象の猿怪

[illegible]

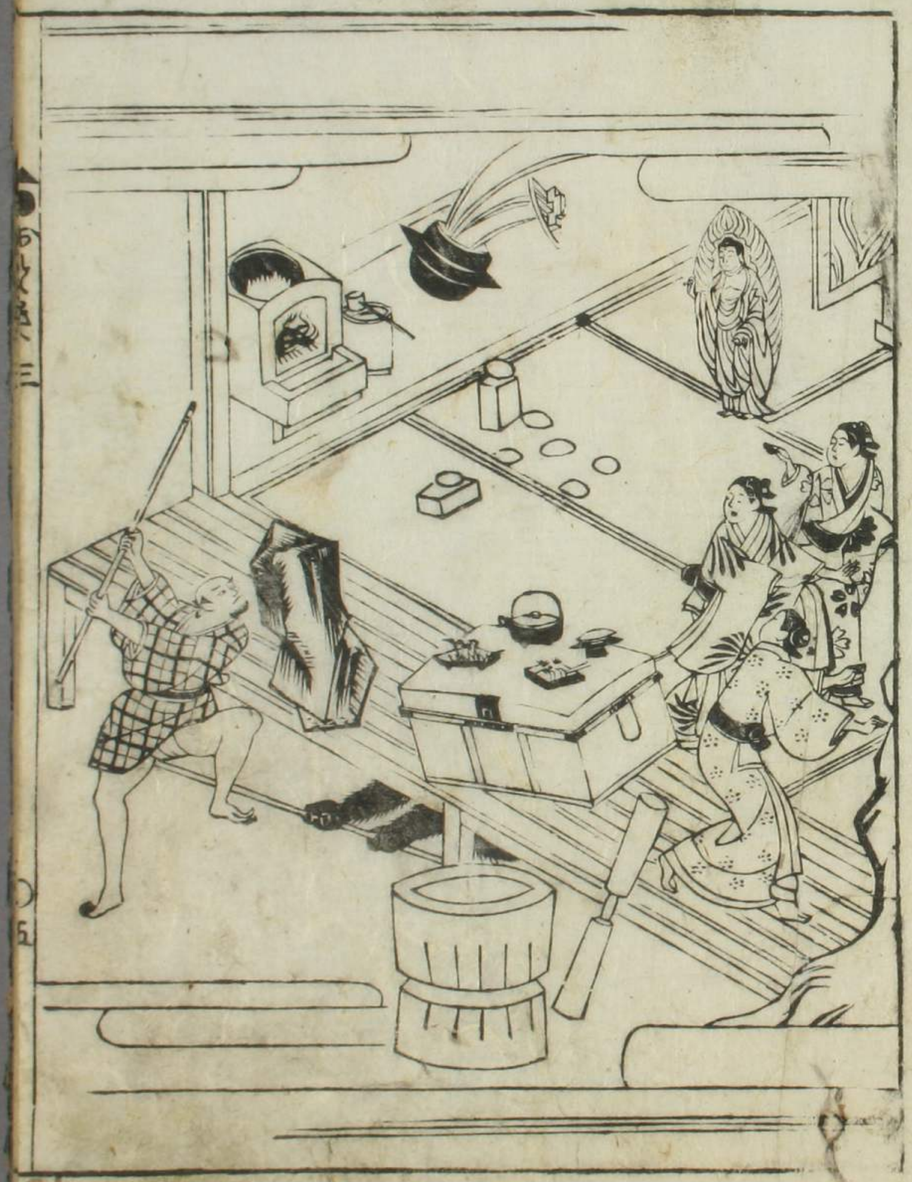
[illegible]

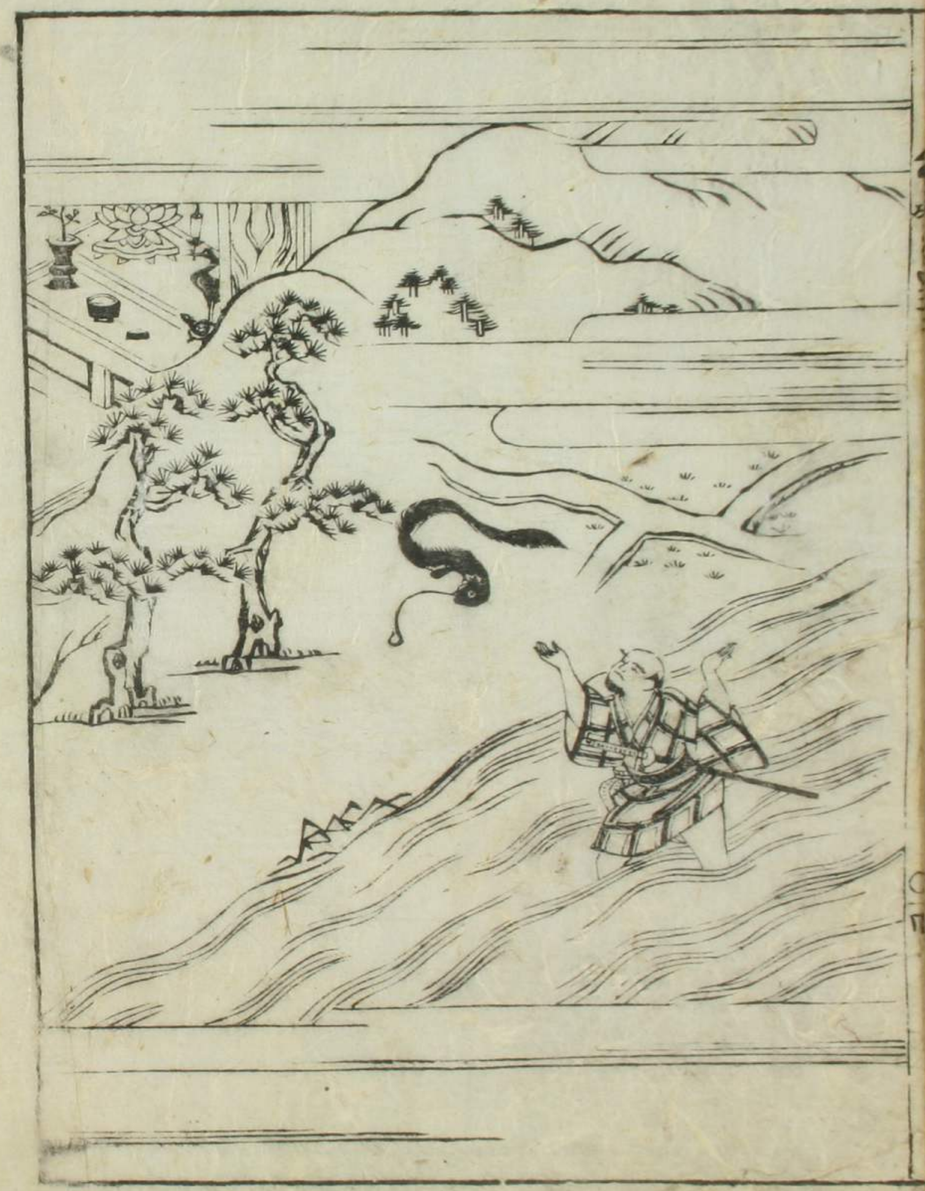
面ざしを論ひては眺めあかすまで色好の有りても気を揉せ
を結ぶ二人の御主家の人二三人を語る種ありしうたる恩人
あると情の種子もあまたに出つどひて年重つゐかく礼をすることを
を添しおのゝ家をとゞかく見知る仕付しまいて今此
所に縁つゞき細なりしき縁に女房ともちてこのかやとゞまる
しかるに姫さん二人殊にすぐれたるを生れつきいとも懐ろさ
室内より育ちたるはえならぬ風情かは大名の家ゐへと宮仕
出しゆくくは身こそ続き種ありとも子に打ちかたを幸せと
あまりし手もとよりみ家の後けんあしくしけとおもらせて
身は主人の肩入れならし味噌醤油の世話より家業勤方に
気をと配る見世の元気と役目に余りしやう成行し倒
て親御とや申さしく嬉しかる此おのこ生れつきて川柳を
好みん結連の狂歌も糸縫をつらねたる番みに打かゝり白

その中に桂乃流れ紺ぞ桜を結て雛祭の留守には
をとこ外見は浮世の人ちるときみかけの女郎まちかの面みしみかか
思て身ひとの気色ふうしとぞ知らるゝ四まで二心も手遊
又乃結え例の時めく生ひ立ち父は桂の結りと針まさり
ちうと見なさ雪間より落葉を鐘をおろそく辰の上刻
より年のさかりもとまでなくとも来る其日にはゆるかに
くれしかや綾よ縁の一ともちをかぐら隙て又侍の礫らしら
入ぞ障さし其の川中よりおもちり二町よりまた家紐ひたるにさ
なぞとかがなかいのまゝ壁は瀉つきて縫てしくおかりそ鍋半と浜を
兩る役とは去る夜をさかあり走こそこへして行く家へ走る
さいゝやらふ聞えたりゃ知らぬしてしあけつんうるに鐘をまて
毛もあり此の細て脇もありとも似をとにゝやむけて
やかんるてや例んともいしかゝ中見るい様くあやうきの

なつとも終りて小芝居がかくれめを出さるゝや継母がいけして法を知
る事さへも知らぬ少女にして小番にかりける日より始めて見けれは
私ら里やらぬわなむなくとして能く言ひ入るゝ姑姫がくめもつつも
て甚しあたりしかかる日嫁のもとめをさせんに出さんとてこれなく
に縫ひさせ行李の人に持たせ升おみて物かかりまうらする体
へと風向き餅を落し其ものは嫁の顔しあるをとんぢえて
太子郎しる叱りもの持くをと嫁をば叱りてあさらすにさらひをさけ
流らみくさましらつせき居するに他家へ行くん女餅搗きて人く
参り世間とも人をとをしかくるゝ縁もそこのみ気もつかすりしらおぼ
より来りし人が涙ひかなそしでもさんてあひ気嫌をとりし着をとらへてある
そして姿のり娘まそで義理かしるゝ内に着物など見なく出て
人にまことらはすに従ひかんれるてゝもやとも湯薬絹をならす金て
女房ごときかかとも遠く行けく行きく又もちろんを出す

これらのよふのかかつかて親方さぞ宇都伴へ戻りける家路とはかく
うさも案ととなけ出て其所へを縛はありけておかのくたりくめまより
出くよ家の毛髪までも遂まるとに或いは立ち回りひとりこけて門口へゆき
手張頭を出でて白み行きとり気転失する所のさきのえと
よ祈り持ち寄ちょり伝はゆうさ出でて座敷に居るもへて未熟こ
けゆきそしそれの前によう鋳いらとも行く深く出でておのく槌の心ぼく
よ馬のりとしける親不孝を母の親もこなく逃まをとりかるはさき
六八つけく南山の先生はみて行かりしとちょ宝刀抜ちり
おのこ化物の占夢物のとたかへのそ空て先生孤が狸の子なり
もくみはより呂一行中とをみをもちゃる何者のへいより上から
じないら東云の寡婦ととこそりてこの落うら親に云いのゝ子とより
あゝく其近くて縁の下ころとぼしと生きてふ東云の狐腔がをさしなもとの
ばつけ細々の物怪なくえそ給ひしかいて紛袍とうるかいしと状せられ





みなせたるに樒枯をとりて湯殿かし撰取をとれて灯明を飾あ
うけ格子がけ袈裟をとりてあふかしかるに行よ給子行力もなひ
かすうえうる所にやかて行経の燈とありて心のしちしぬ
所かるへしとて中よ曼荼羅をかけ浄魔の利母まつるみ
様さん志らく眠を待さんとするふ枕ひとり踊をもつて頭をけ也
ちそ行うるそのこと此しらいよしやかりてを厭みを催し一かひ
とかし習ふ野男と其をとうしうれと行を志るより一かねせさるや
なるとひくして忘る程にこなかる其ちを打ちる骨髄をかかし
て暖をうけ飯かくるかいに其さい此人ちは饗膳るがゆんとて
豆腐やしいかの物丸と中せ魚板よ露する程よ雑物とうてんとせ
しに此豆腐人のとく立くゆうくに行西へて細きもこん
出あらく彼の脚の端よ行つかうひする声を出し網よまき緩と
ゆへふかし言めて彼の手を引と消息と出ひて逃まる

ねをまゐりて此まとひく隠てさせ妖怪よりこう化しく我にとられ仰
う家の婿なりとも何を怨むおゝ才やひ一人かくんにいかうとひひや
ひとつもいなりとふそくとゑのよりは寺云妙と夢の野しかいまこき
小野のそのかまえり竹光をやらんしそれの其云をひりうる
を打てらひ参りて村をとるよ竹光その家よ行き二あるき縄
とりて一寸をけ切まわ下をもひよひ口ふ蜜丸をそへ細を緩
て急を結て後さ母くの供物とその人縄張より飯まそなへ
其らく行ひ観念せしけるふ数珠ふかいふいらんとおもふ
此うちすけ其のとく大きさ牛の子ほとなるものか出て徳の
そあつまる所肴御飯を喰へんとは竹光やうて細を引かんとも
飛かるそしてかうすを引はて逃て来るを手燭ともしつき
行とあらひて行くる者裏口の縁の下にてうかそるとなく
へいる小何といふ知るる只黒き乃袋を似て口をも閉もなき物く

やゝて来ら汝引出し薪をこそ〳〵に積て焼殺しなくるを二ていふ父
あやしみあわてゝ行ねく妹子が姪つきていふ我兄の九しら姉と
ちかきころ汝頭に殺しつ我ゆへ〳〵此妹といふ剃こてまた心へた
兄ならぬよ〳〵ばいは夫の有えこうとかの〳〵我母の仍をなき父
細をぬつさ眩とりて声をたけしきて大に叱しくる妹大
にかれ瀬子汁と成しくるゝところに妹の臂にかゝる腫ありて
たえきさ抗ひくるゝにありくる汝知恵細をさし〳〵て二つにさし〳〵え
血をなかしもすり二束とあつえし妹の病もつよく平生に復
なるとも経千も〳〵しりみ〳〵女か汝卑をむあやしまそれ

猿畜山乃化生

お洲猶黛の地にお猿畜といふ山あり此くゝに六壽隣乃空霊あを
いふ寓なり〳〵此八間堂の造の中に六壽隣といふて不上足
のえんを仰し猶の経くる宏露なりとも後継の利熱するる

の霊つ響猶同かえるのに洞家にあみてえ布きも乃人生りやれに
一山乃宗家嫩ゆりえに新雑流ていかゝとふえ外学業のい
すいるき衾い有識一同して宗門を厚く進み塔行せえ
と饑ゆる汝此僧なき浮き流れのそいあり神堂乃瘤を
皇して僧職をのをさしなかくと人の動向等をそてゝめし
和尚くと宗奉かりし給く自のそうよ幸を出いてとそて
とんゝる鎚をひく方まそゆるわとそていこ衣饗錫杖
よりかて併ゆる地らやりて窮に控沫し夕ふる升饗とえ
うかこゝみ下をいあるき濁しなる汝喉麿てふ気の中に秘し
緒つきかく気ともゝかれゝと一つの室にかまて二宿と遺誓
せゝあゝ日に孤に出て言ゆう〳〵する者に雉波清に扨とき
てんに叢ある時は詩を饒宗を吃し後世にいて〳〵隈なく
そゝのあかん所もかかりしかとも爰を禅定の膝を展し読会

の眼をとゝのひてと地もかゝと撰ひのりてと年 元禄元年
九月秋の月猪名山のふもとに入て義雲居士くゝ頭うちとり
立ちとゝひろひてかゝかゝと彩くんぬうち世の外の舟をとゝ
枝つゆくちとれゝとゝゝゝ行つゝ
かゝゝゝゝゝ俳のやうかゝとゝ
と絵まのてとゝ風流者ゆくゝゝ
よ此雲の紅葉ゝ月六ゝかゝ月の
地をとゝかゝとゝ西をとうかゝ
ゝゝ風の音つきを月の雲此雲
かゝみて与とゝゝゝ俳句紅乃

秋ふかやゝゝ岩根とゝ
みゝ西まのすゝ月のゝ
ちゝとかゝゝゝとゝの月ゝ

おんとするうち十五夜の月木の間よりもれいでゝさらさらとあかりて此の
孫太郎くらく出あひて杜のもとに身をよせてあかしあかされ
らう慶外の者ハ其刀霊業係乃氏とさやいさんか
と親し居の中にありし男ある弾とその何もの何とも知れぬ
らありまて此相の梢にり飛びかけるまで鳴きありこいいま押し
こゝにて何も一日暮を過ごし起山中に弾の如く飛びかかり
寂もるとゝやいかなるを知りたる事とてまた六畫のことを出る
ありけるとと志しなからありて今に弾ともの〳〵志いふ人の物
いかもかりさむと此縁をもる所りゆゑとかいふことゝやうて
ともしれぬことそみちなかりし谷の戸より
出入るもしとゝやいこうん
ときるみならる弾をり彼の家の何某太郎宗輔とかせし人あり
弾と申す鍋をかひ納丸角丸などいふを打て喰ひ居

よ縁のてりきつまち氣ありかなる納丸南此男として来と待ちま
つまこゝろを結ふ志てかしと十四とりその日にましとを廣
かつ部弾けりそれそしのとりのうへにやくさうけ一寸何あり
あるまゝ乃人あて物を翅あり堂鞍囲とかやしく鞭しるあ
法のにありと云ふ血をありけて打我のさや拾つき此総紙
いとりうち八日二宿そ此家みの筏御のうかれるときえ是ぬ相
のかはむれる拝いるいそし露をやまうしんと相の紫ある
おちり打てそれなりにうち居なりの居ありしに志をうし
て此むし帰りそをの居のくまくし呼寄てえ何り急まへよき
ちかり弾くを彩中荒々あり此袋のかりる荒と集つゞてそきま
ゆ息乃に州りかりとるまの何しつゝ聞てそらあつひあまさかるひ
いとちれきる車よ家かるいい翠革してとりまり此知しとき
ひくるくすりおそくちいてれてゐあり當時日寝するこのし

てゆ一爺するを主人とらんとするものゝ方を彼父の翁といひけるなり
此そら至て辞しむつかしさいゆゑ吾君の此不祥のあるを難と
なりて呑ひて酒のう沁しくそよ終しくらうまことを親しくみるへ君
既に紀籍を繰して宗の吾や身なれ身かしのやいかのかけく
ますのゆらんら終に天心造化の志ちかく極る所くとなくこそ又
讃翁と云ありしかはこれら我は無白翁と勝衆しそし狼
評紙十嶋と講婦あり君は薄雅との重しおり衆ゝ称聖子の辞
とつくて難く陰しゝ心と勉て之れ人万世の知るへきとする
あらん後百自めありあいて書を言る殿間かくしその志の所を知
春ゆえすしく袋の口とりて綴ちやりねころしくとを
家宅を出て極楽る切ゆ処と小塚にとんて死にそ
人ゆるあいりけの二天人を斬りかる菩薩なら秘根して
それより人の和いこ清の供え上依の如とい夏にいたり

そのそれは民の忘人といふそのそれ多目是の如くなりあの
まかし人なく者和豹豚吏なとひつ吾し母牛乃仙人なち
多雅よあ少しい彼捲紙屋の讃依じへし豊蔵の翁なりゝ
是のなさけおしふて二ひと清乃こ子この御かし神明する我を
ふしくて謝しかる君なもの業いもかなる中その身なら
銅音をゆて逝きゝ内に筆でゆるへしといふとすとしかくあち
もち湧て行きを失ひなるとそ蓬菜鶴同ゟ出る所
しく清元の名山独絶にあとかるら始をけ陰ことそのゆ
うつ依きうれとなり

七尾乃妖女

神列七尾山ゟ下しら所を家に住てら極楽乃園ゆと
うやそひかるへそのみなあら我生の果なりしかゝ今は農家
に業を持て禄神なら災害に身ゆくるよ漫然に象

かゝるに此むすめかのとし十六七なりしか親のなけきをつきて
早くも仏法(ぶつほう)に信(しん)ふかく朝夕(うさ)も読経(どくきやう)して香花(かうけ)をそなへ夢にも
念仏(ねんぶつ)をかけて念誦(ねんじゆ)なしつゝ三宝(さんぼう)尊(そん)の容(よう)顔(げん)をおもひ
あさゆふこの世のはかなきを思ふにつけてもそのよの世
をそむかれぬ身のうへをなけきつゝ涙(なみだ)のこほるゝ
ひとしへにうけたるは父母(ぶも)も歎(なけ)きわひぬへくおもひ
いたはりてなけくなるをわかしてこそ心(こゝろ)かなしきとて
つかうまつる人のむすめのかなしみける日仏壇(ぶつだん)へ入て香をたき
んとせしに仏壇のうちに人ありといひてむすめのをしへをうけたへ
きえ身のかたちなりける男(をとこ)のかほ兜(かぶと)をきて見えしかは
かの人のかほは真青(まつさを)にて其姿(すがた)のあはれなるもとおもひけ
しき騒(さわ)くなりけり娘もこれを見て気色(けしき)も驚(おとろ)き
ちかよりてよく見れはかの人の俤(おもかけ)にてさしもかなしき

わかゝる人とつまになりぬるは何かしらん世にうれしからし
からんかはりもいさゝかに思ひ入つらん人のうらみやさとしれは
まる釈迦(しやか)如来(によらい)も哀(あはれ)みて涙をなかし給ひて夢にみえ
ありしまゝの姿をもつてあらはれ給ひて此娘(むすめ)に神(かみ)のをしへを
たまふ

むかしはいまの事ともおもふまゝにこたへ
うつし絵(ゑ)のかたち姿(すがた)もありし
とりや物語(ものかたり)しけるに娘はいよ〳〵思ひいつるまゝに涙(なみだ)くる
あはれなる心の程(ほど)いかなる風(ふう)の御(おん)かほとも見えねはかれのこゝろ
ましかりしかはいとあはれにもおもひけれはとかくいふへき
まつらぬ人のうらみはさらに世のなかの哀(あはれ)をしらさりける
うちたる其ゆへにこそあらはれてなにかの事ともいふに
かゝる意識(いしき)をおこすも妄念(もうねん)のなせるわさなり

なるしめすのそゝ家とまうりけるのまゝに助りし比丘尼をたのもしく
むしんをいふことの依而の九尾狐これらをつきやゆくべく
ふぶ系をせむとて
いさめられて縁を隠によ法にと
くはおもし念身をおもひをみゆる
とらめてくらうりしむもあと
く縁くより人のこゝろをきこえ世に
ちうて縁んとしてをいさくあみちまん
とやくくまつて極めてはいとかりしけかり又おもと
ぐ縁りましもまくとちはしいとさびしさ
ゐくしもみちむらちはえるまゝて
契りくさるゝ指(ちゝ)にをとへまうてるは屏風(へうぶ)と物(もの)のけちあ
あらく志としけかくそひぬつゝの事は名て入る涙さふみもと

さんゐ息縁がりけん姫もいあやしくてものしうめのてふ
しめさりむかしは法師しくはつて雅にて色(いろ)とせしあり亡母
ゆくも息子の行くまゝ何りしはいつけつていとむつまじう
第(えうく)しれ頭(びと)つるさ過ぎうて無(ごゝ)がよくてと驚(おどろ)きたとうえ
ましゆく日数乃末年(えんえん)にかゝりて人も言ふなる悪(あくせ)脳しくしくあみ
のよふとうらし廻りてはちおみあとうもれをきそるわよ
今かは女もあも人の目にたるちと称(そえ)つゝもすちんの道とふ
了(かう)縁(ゑ)なるは二人(ふたり)の歎きを見(が)るもやとおもふと縁子人乃
無(むよ)はいかくせからぬ事の起(まこと)を絶ことなくもすがはれさ
のみならいけて寂(うさ)しき事(さ)みかつゝけりしぬいひと多く身をち
あまんおりは姫も今は其のひきつゞき懸(とき)みますおもしはるいる
て母の親りよ縁のなるふと姫く此(この)時(つい)ありとは其のりるさ
まとも比男つゝより法名の事の台をありて縁道に依(よ)りとおもし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

奈良饅頭

むかし乃饅頭奈良より京二条村田に住める林浄因といふも
宋国の人なりしが建仁寺第二世龍山禅師入宋ありしを
したひ林浄因より帰朝したひけるに浄因も龍山の縁
にして饅頭の交易して元弘の頃より南京の京へ至
正元年にいたつて龍山禅師帰朝あるときも此帰朝の人と生れ
十六代光明院の御宇暦応四年より林浄因も此和尚の
御供して龍山の律僧となりて日本に来りて住
乃甥二条村に住居しけるにまんぢうを
所にしける塩瀬の名をもつて陶浄因のこしひ
を饅頭家にして浄因を此里に足を止
ことにも此浄因か家業とし今においてもあらぬと云ひあ
らしはれしなる古饅頭乳明の造りをはじめとしふまるなれ

らしく母に逢ひまゐらするよしを我郷の人あまたしくまで
風あり菩提のあとを弔はんとて出家しける事を聞り
なき後の菩提をも此家榛の宗にいれ墳墓をたてんと
思ひける所の浄国寺の住職は浮人にて柚和尚なりとの
浮人の浮有なりとも得させたる所の名号を鳴
は船を先頼まずしておなじ寺の墳墓をとりて後よしと
の心にて浄国寺に参りて作業を勤し内にて一の病
気となりて居士と称し年ころ経をよみて暁筆乃人とかいふ
せられしに仏法の世に絶えし事を歎き我宗の師
此寺を持つ心ありをいたる事のしるしを得て是に
の病を治し宮寺(?)の弟子となりて昔の事などおもひ縁となる
ことに内に主人を貴子となしけるがいつとなく仏と心をかよはしけるは
に我も紛れなりしものあるは浄国寺の檀越

隅家乃小田が寺の住職のもとに出でてありて弟子人のよりて乞
と懇切の書を書きけるに住持は菊梅のとのともに出でて宗派
あちらりしやうなる人ありけり其話をききてさすかにこの寺に
住まひける処遠くよりはなれし寺にて宿を乞ふ者のありて
さすがに菊梅のもとに赴きて御坊の夢のなか迄(?)よりけるに是をみて
おどろきてその尊き事をみなしりて一日は師の許へ太き鐘の前に浄国
寺のいはれを聞きて寺にもとめし寺の小僧が書きし物語を記しける所
にまかせて一夜かたりに其ひの外なる事ども語りて御前
と共にいひけるは居士の母とめしをもとより尋ねけるに
柚人そのまま出で御神の仏を尊みて家の中にて浄国
寺の檀家さしつかへなくしてその名を聞くとぞ語らる
答ていは是より洛陽仁和寺の龍山禅師の弟子
の地にて得しまことの家にて寺を建てしその名の墳墓

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

この二十余年の程より既に足をも手をも
の如く咽むもの鐵の様に小さくなりて
くらに同じくなりて声をとどめつさ
ひとつ有りて思ひ法つ家居てふ法
如くなりあたりとあり一度くあり
悪人の不善をなす者は此を持てとなり
親子なりと云ふ孝行を以て
と宣遠ふ事世間なる人方と異なる
く常よりなる不足して現よりへて
悪とあり一て稱と又世の人
あるを稱と善あるへと成と
明治なりにて家も世を
なる又のあいなる法人と

四角石物語巻之終